

私が母の存在を知らされたのは平成七年の五月二十日でした。母の弟で私には叔父さんに当たる人からの電話で、そのことも初耳でした。さらに母がいたことも驚きでした。その母が三才の時発病して家を出て、栗生楽泉園に入り、そのまま五〇年が過ぎてしまったこと、目も手足も不自由であるが現在も栗生楽泉園の第一センターに生活していることを聞かされた時は、まさに晴天の霹靂の感がありました。正直言ってその時は、飛んで行って逢いたい思いよりも、このことが嘘であってくれればいいのにと思いました。

私の父は亡くなりましたが三重県の母は今も健在で、こんなことは夢にも思わなかったのです。

苦しい日々が続きました。一人になると電話のダイヤルに手はゆくのですが最後迄回すのには長い時間がかかりました。母も電話の向こうで息を殺して待っているのではないかと、今思えばそんな日々が続きました。

私が療養所に居たことは母にとっても寝耳に水で、ショックは大きく「今頃は子供や孫に囲まれているとばかり思って居たのに……、今日までそれを支えに来たのに……」ようやく、はじめて掛けた電話の向こうで本当に母の叫びは悲痛でした。その時、私の数倍も数十倍も苦しんでいる母の気持ちが届いほど分かり逢いにゆく決心をしました。母は私が三才の時発病し、三重県の母に私と父とのことをたのみ、栗生楽泉園に入園したそうです。叔父さんが私の消息を尋ねようとしたきっかけは、私の妹の短歌に関する記事を新聞で見た時とのことで、運命的なものを感じました。

もう、十年くらい前になるでしょうか、第三回全国友園カラオケ交歓会が栗生で開催され、私も応援で草津を訪れましたが、その時は本当に旅行気分でした。ところで、今度はいろんな出来事を経ての母を訪ねたのは平成七年九月四日でした。この日、私のなかで時間は止まり痛いような静けさの中で盲導鈴の音だけが耳に焼き付くようでした。

その時の想いを母は楽泉園機関誌 高原に次のように詩を作っております。

再会

五十年ぶりに娘と会った

娘はもうおばさんに成長して

私の知らない娘であった

三歳の特別れたきりの娘

娘は孫たちに囲まれて忙しく暮らして

いるとばかり信じていたのに

娘は私と同じ病気にかかり

幼い頃から島の療養所に入所している

と弟から知らされた

私の胸は張り裂けそうになった

涙が夜の川のように流れ

五十年間の悔いが大波のように打ち寄せ

てきて

私は木の葉のように打ち上げられた

娘も同じように親子の再会に驚き

心が静まるのに時間がかかった と

正直に話してくれた

娘は明るい性格らしく

陽気にふるまってくれ

五十年間の空白をもみ消すように
一生懸命だった

私は暗い胸を撫で下ろしながら
娘に感謝した

そして「お母さん」と呼んでくれた
娘を思っただけで思っただけ

(高原一月号)

感激の涙とか、劇的な親娘の対面、そういうものはドラマの世界だけではないかと私は思うのです。逢いたかった！心から、そう叫べないもどかしさ、二人をここまで隔て、巡り合わせた運命に私達親子は試されているのだろうかと思いましたが、現実には、お互いに苦しいまま別れたのですが、でも胸の底には、空白を取り戻す時間がきつとある、これからなんだ、そう心に言い聞かせました。

母は、不自由でしたが、身体の方は元気で、私はその母が死ぬなどは、思いもしませんでした。

元気で春の再会を約束したのに、その母が体調を崩し、そして三月、四月と病室を訪ねましたが、五月四日には帰らぬ人となったのです。

同じ療養の身でありながら、母であり、娘であることを知らずにきてしまったこと、この五十年の空白はあまりにも大きくそのことが解決されなまま、母は旅立ってしまいました。